

「山に登る！！」 ～アドナイ イルエ～

創世記 22：1～14

あなたは今、ゆとりのある生活を送っていますか。子どもたちは生活に追われるということはありませんが、だんだん大人になり、責任をもってくると、本当は楽しいはずのことなのにそうなくなってしまいます。立派になればなるほど責任が伴います。だからこそ私たちは信仰をもって山に登らなくてははいけません。目の前のことだけを見ていると山に登るのが辛くなります。しかし登りきったときに感じる恵みはとても大きいのです。聖書の中でも山はとても意味があります。(創22：1～18) アブラハムは神の前にしっかり自分を保って国を変えていく人になりました。私たちが神様に選ばれて神様のことばを聞いているのは私たちがアブラハムと同じように祝福されて、私たちを通して海の砂、空の星のように、正しい考えをもった私たちの子孫が増えて神様の栄光を現していくという神様の計画があるからです。「アドナイイルエ」とは「主の山に備えがある」という意味です。アブラハムがイサクを殺すときどんな気持ちだったかそのことを私たちは考える必要があります。アブラハムがいたベエル・シェバからモリヤの山まで80kmくらいありました。やっと生まれた子を殺せと言われ、イサクに自分を燃やすためのたくさんの薪をもたせ、モリヤの山(主が備えられた山、顕現の山)に行ったのです。何十年も子が生まれず、そばめに子どもを産ませたらそれが問題となり、そのあとすぐの出来事がこのイサクの件です。「理不尽」です。でも神の国の出来事は毎日がこの世の法則とは違い、このようなことなのです。だから私たちの目から見れば「理不尽」です。私たちにとって理不尽かどうかは自分が幸せになるかどうかなので、そうでないことは全て「理不尽」なのです。「何で私がこんな目に！」と思うことはありませんか。先のことが見れないので、目の前のこと(されたこと、やられたこと)で理不尽になってしまうのです。アブラハムが信仰の父になった理由は、ただひとつ、そういう理不尽な状況の中で逃げなかったというだけです。「それでアブラハムは若い者たちに、「あなたがたは、ろばといっしょに、ここに残っていないさい。私と子どもとはあそこに行き、礼拝をして、あなたがたのところに戻って来る。」と言った。」(22：5) アブラハムの心の中心はいつも「神様が備えてくれる」でした。イサクを殺さなくてはいけないけど、神様ならその子を何とかして生き返らせることができると知っていたのです。そう思えたのはサライが80歳になってイサクが生まれたからです。アブラハムは何十年も神様の奇跡を通して「神様は生きて働いている」ということを学んで「信仰の父」と言われたのです。だから今私たちが試練を通っているならそれはすばらしいことなのです。試練と共に脱出の道が起き、試練を通して学んだことからあなたはすばらしく立派な人になるのです。モリヤの山は今のエルサレムです。そしてここでイエス様は十字架にかかるのです。信仰の父である人がすべてを捨てて神様に従っていく、このことを通して、神様の思いはそれだけのものであるということを伝えていきます。そしてイエス様が十字架に架かったときにそれは表れ、今は私たちの心の中にあります。そしてもう1つ聖書の中にはシナイ山という山も出てきます。ここはエリヤという預言者がバアルの預言者と戦い落ち込んだ場所です。エリヤは立派な預言者でしたが、神様がイスラエルの民を愛してたくさんの奇跡を起こしたのに、それでも自分を殺そうとする姿を見て、「もう疲れた」となってしまったのです。その時、エリヤのもとに、御使いが来てパンや水をくれ、その後、「外に出て、山のうえで【主】の前に立て」(I列19：11)と言われました。私たちは山に目を向けておかなくてははいけません。それは私たちが生きてきた道だからです。私たちが生きる道は平坦ではなく山を登っていかなくてははいけません。登っていくなかで神様は私たちにたくさんのことを教えてくれ、登りきった時にすばらしいことが起こるのです。だからラクな方法で山に登っても意味がありません。奇跡を起こすのには意味があります。辛いところを通ってきたというのは、あなたの山にはよっぽど意味があるからです。でも私たちの多くが途中下山してしまうのです。アブラハムは安住の地から抜け出して80キロもわが子を殺すために進みました。あなたの安住の地から抜け出し、山に進み、信じて登れば必ず祝福してくれます。山とはあなたの人生です。進めといわれたところへ信じていけば、確かにつらいこともあるかもしれませんが、神の国の信仰を持つことができれば必ず登りきることができます。途中には備えはありません。だから一つ一つ山へ登って完成させていくことが大切です。あなたが通った道をもう一度通る必要はないですが、途中下車だともう一度です。あなたの山は毎年、登りきらなくてははいけません。今度はあなたとあなたの教会(子ども)と一緒に登るのです。そうすれば祝福があります。絶望していたエリヤは山に登ったとき、それでも従ったイスラエルの民と新しい王、自分の後継者であるエリシャを得ました。どん底で山に登ったら希望を得たのです。(Iペテ2：21～25) イエス様が私たちの前に逃げない道を通りました。「イエス様は神様だから・・・」ではありません。イエス様は肉体をもったので、私たちと一緒にです。あなたが今辛いなら、辛いまま登れといっていない。それは置いて登りきりなさいと言っているのです。登りきったらその山の反対側が見えます。自分がこれだけとは思っているものを捨てる思いでいけばもっと得られます。(Iペテ2：7～21)「善を行っていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは神に喜ばれることです。」(20)これが山です。しかし私たちが理不尽だと感じていることの多くが、自分で蒔いた種を刈り取っているだけです。(ヨハ12：24～26)「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」(26) イエス様がいるところとは苦しみの中で山を登り終えてみた神の栄光のゴルゴダの丘です。イエス様の道もあなたの道も同じです。そしてあなたの罪はもうおろされました。だからこそ主の備えを信じ、1つ1つ山を登りきっていきましょう。(要約者：岩崎祥誉)